

自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討

— 友人関係への影響の検討を通して —

上地雄一郎 ・ 宮下 一博*

自己愛的な傷つきやすさを測定するために筆者らが作成した自己愛的脆弱性尺度 (NVS) 短縮版の妥当性を検討した。具体的には、NVS以外に、他の自己愛尺度である自己愛人格目録 (NPI) も併用して、自己愛の誇大的・顕示的側面と過敏・脆弱な側面が友人関係にどのように影響するかを検討した。友人関係としては、自己隠蔽、被愛願望、気遣い、対立不安の4つの側面を取り上げた。その結果、NVSとNPIの下位尺度では友人関係への影響が異なる点が見出され、NVSの有用性が確認された。また、NPIの3下位尺度のうち、注目・賞賛欲求と他の2下位尺度は性格を異にする尺度であるという示唆も得られた。

Keywords : 自己愛的脆弱性尺度, 妥当性, 友人関係

問題と目的

近年、自己愛や自己愛の障害に対する関心が増大し、臨床的な事例研究だけでなく、質問紙尺度を用いた調査研究も盛んになっている。たとえば、日本パーソナリティ心理学会の機関誌であるパーソナリティ研究や日本教育心理学会の機関誌である教育心理学研究には自己愛に関する論文がたびたび掲載されているほか、こうした学会の大会でも自己愛に関する研究報告は増大している。

ところで、自己愛パーソナリティについての従来の研究では、自己愛パーソナリティとして誇大的で自己顕示的な人がイメージされていたが、最近ではこれとは異なり、恥意識が強く、注目されることを避け、他者評価に過敏な自己愛パーソナリティが存在することが注目されるようになった。このような変化の契機となったのは、Gabbard (1989,1994) や Broucek (1982,1991) などの臨床家が自己愛パーソナリティに2類型を区別したことである。そして、Wink (1991) が一般人を対象とした研究において、この2類型に相当する誇大的・自己顕示的傾向と過敏・脆弱な傾向を見出したことが、上記のような調

査研究に火をつけたということができる。

実際、Gabbardの考え方に基づいて自己愛の2類型を測定する尺度も作成されている (高橋, 1998; 中山・中谷, 2006)。また従来自己愛傾向の測定に用いられていた自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory: 略称NPI) の日本版で最もよく使用されている小塩 (1998) の自己愛人格目録短縮版 (Narcissistic Personality Inventory-Short Version: 略称NPI-S) についても、注目・賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性という下位尺度のうち、注目・賞賛欲求は過敏で脆弱な自己愛傾向と関連があると思われる。作成者の小塩自身 (2002) がこの3下位尺度の主成分分析から得られた2成分を組み合わせ、誇大的な自己愛パーソナリティと過敏な自己愛パーソナリティを区別する試みを行っている。

しかし、この過敏で脆弱な自己愛パーソナリティについては、Gabbardなどが言及する以前に、自己愛の研究で有名なKohut (1971) によってすでに究明されていたのであり、Gabbardの分類もKohutのいう自己愛パーソナリティと、(それとは対照的な) Kernberg (1985) のいう自己愛パーソナリティの臨

岡山大学大学院教育学研究科 教育臨床心理学講座 700-8530 岡山市津島中3-1-1

*千葉大学教育学部 263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

An Evaluative Study of the Narcissistic Vulnerability Scale

Yuichiro KAMIJI and *Kazuhiro MIYASHITA

Division of Clinical Psychology in Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530

Department of Education, Chiba University, 1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba 263-8522

表1 友だちとのつきあい方尺度の因子分析（因子パターン行列）

項目	因子1	因子1	因子3	因子4
友だちには自分の本心を見せたくない	.84	.04	-.11	.00
友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である	.83	-.04	-.08	-.10
友だちにはありのままの自分を出せない	.73	.02	-.02	.16
自分の内面に踏み込まれないように気をつける	.69	-.27	.05	.01
友だちとは当たりさわりのない話題ですませる	.66	-.01	.01	.01
友だちに自分の考えていることを全部言うことはない	.57	-.23	.16	-.25
どんな友だちとも仲良しでいたい	-.14	.86	-.01	.00
どんな友だちとも楽しくつきあいたい	-.18	.85	-.07	-.07
どんな人とも友だちになりたい	-.25	.80	.06	-.12
誰からも良い人と思われたい	.30	.66	.04	.14
友だちの気持ちに注意を払う	-.07	-.19	.92	-.04
友だちにやさしくするように心がける	-.15	-.12	.86	.12
友だちを傷つけないように注意を払う	.04	.11	.74	.10
友だちをがっかりさせないように気をつける	.05	.23	.65	-.22
友だちから無神経な人間だと思われないように気をつける	.15	.22	.45	.02
友だちと意見や考えが対立しても自信をなくさないで話し合える	.00	.12	.09	-.83
友だちと意見を交わし合っても、それほどまどわされない	.33	.22	-.03	-.82
友だちと意見が対立するのがこわい	.19	.25	.08	.61
まわりのみんなと意見を合わせるようにしたい	.20	.28	.08	.54
因子寄与（累積寄与率62.81%）	3.75	3.62	3.23	2.42
因子間相関	因子1	-.09	.12	.12
	因子2		.34	.23
	因子3			-.01

床像の矛盾を総合しようとする試みである。

わが国の臨床現場で出会う自己愛パーソナリティには、誇大的・自己顕示的というよりも過敏・脆弱なタイプが多いことから、筆者ら（上地・宮下，2005）はKohutの理論に添った質問紙尺度の作成を試みた。この尺度は、自己愛的脆弱性尺度（Narcissistic Vulnerability Scale：略称NVS）と名付けており、①（他者からの）承認・賞賛への過敏性、②自己顕示抑制（自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向）、③自己緩和不全（不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さ）、④潜在的特権意識（自分への特別の配慮を求める傾向）、⑤目的感の希薄さという5つの下位尺度から構成されている。そして、この尺度の項目数が40項目もあり、他の尺度とバッテリーを組む場合に回答者の負担になることから、筆者らはその短縮版の作成を行った（上地・宮下，2009，印刷中）。

本研究では、この短縮版の妥当性を検討する一環として、NVSで測定される自己愛的脆弱性が友人関係にどのような影響を与えるのかを検討する。その際に、NVSとは性格を異にするNPIも併用し、両者が測定する自己愛傾向が友人関係に異なる影響を与

えることを確認することによって、NVSの弁別的妥当性の検討を行うことを意図している。

方 法

調査協力者 大学生141名（男性37名；女性104名）

質問紙の構成

- ①自己愛的脆弱性尺度短縮版：筆者ら（上地・宮下，2005）が作成した自己愛的脆弱性尺度（NVS）の短縮版（上地・宮下，2009，印刷中）。「承認・賞賛過敏性」、「自己顕示抑制」、「潜在的特権意識」、「自己緩和不全」の4下位尺度20項目から構成されている。
- ②自己愛人格目録短縮版：小塩（1998）が作成した自己愛人格目録短縮版（NPI-S）。「注目・賞賛欲求」、「優越感・有能感」、「自己主張性」の3下位尺度30項目から構成されている。
- ③諸井（2003）が自己愛と友人関係との関連の研究に用いた「友だちとのつきあい方尺度」。この尺度は男性用と女性用に分かれており、男性用と女性用で因子構造も異なるため、本研究では、男女

表2 自己愛傾向の各側面と友人関係との相関

		自己隠蔽	気遣い	被愛願望	対立不安
NVS	承認・賞賛過敏性	.14	.32 **	.19 *	.30 **
	自己顕示抑制	.36 **	.30 **	-.05	.09
	潜在的特権意識	.24 **	.11	.06	-.01
	自己緩和不全	-.20 *	.20 *	.27 **	.27 **
NPI	注目・賞賛欲求	-.07	.24 **	.30 **	.17
	優越感・有能感	-.10	.05	.10	-.27 **
	自己主張性	-.21 *	.09	.00	-.59 **
		N=141		* $p<.05$	** $p<.01$

表3 NVSとNPIとの相関

	承認・賞賛過敏性	自己顕示抑制	潜在的特権意識	自己緩和不全
注目・賞賛欲求	.47 **	.13	.43 **	.31 **
優越感・有能感	-.07	-.07	.13	.05
自己主張性	-.17	.04	.06	.06
		N=141		** $p<.01$

に共通の因子に負荷の高い項目から、男女に共通である24項目を選んで使用した。

分析方法

1. 諸井（2003）の友だちとのつきあい方尺度の因子分析と下位尺度の構成
2. 自己愛傾向の各下位尺度と友人関係の各下位尺度の相関の算出
3. 諸井の友だちとのつきあい方尺度の各下位尺度得点を基準変数とし、自己愛的脆弱性尺度短縮版および自己愛人格目録短縮版の各下位尺度得点を説明変数とする重回帰分析

結 果

1. 諸井の友だちとのつきあい方尺度の因子分析

諸井の尺度を因子分析（主成分分解）した結果、固有値の減衰率や因子の解釈のしやすさから4因子が妥当と思われた。そこで4因子を指定して再度因子分析を行った（主成分分解プロマックス回転）。どの因子にも負荷の低い項目を除いた結果、19項目が選択された。この19項目に対する最終的な因子分析（主成分分解プロマックス回転）の結果を表1に示した。累積寄与率は62.81%であった。

因子1は、「友だちには自分の本心を見せたくない」とか「友だちに自分のすべてをさらけ出すのは危険である」などの項目に負荷が高いため、「自己隠蔽」と命名した。因子2は、「どんな友だちとも仲良しでいたい」とか「誰からも良い人と思われた

い」などの項目に負荷が高いため、「被愛願望」と命名した。因子3は、「友だちの気持ちに注意を払う」とか「友だちを傷つけないように気をつける」などの項目に負荷が高いため、「気遣い」と命名した。因子4は、「友だちと意見が対立するのがこわい」とか「友だちと意見や考えが対立しても自信をなくさないで話し合える（逆転項目）」に負荷が高いため、「対立不安」と命名した。

各因子に負荷の高い項目で下位尺度を構成し、それぞれの下位尺度の信頼性係数（ α 係数）を算出したところ、自己隠蔽が.84、被愛願望が.84、気遣いが.79、対立不安が.71であった。

2. 各尺度の下位尺度得点および相関の算出

自己愛的脆弱性尺度（NVS）短縮版および自己愛人格目録（NPI）短縮版については、それぞれの作成者の因子分析に従って下位尺度を構成し、下位尺度得点を算出した。つまり、NVSは承認・賞賛過敏性、自己顕示抑制、潜在的特権意識、自己緩和不全の4下位尺度得点、NPIについては注目・賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性の3下位尺度得点が算出された。諸井の友だちとのつきあい方尺度に関しては、逆転項目の得点を逆に変換し、自己隠蔽、被愛願望、気遣い、対立不安の4下位尺度得点を算出した。

自己愛傾向の各側面と友人関係の各側面との相関を表2に示した。また、NVSとNPIの相関を表3に示した。

3. 友人とのつきあい方の各側面を基準変数、自己愛傾向の各側面を説明変数とする重回帰分析

(1) 自己隠蔽を基準変数とする重回帰分析

表4のように、NVSの自己顕示抑制と潜在的特権意識が正方向の有意な影響を示し、NVSの自己緩和不全は負方向の有意な影響を示した。説明変数全体の説明率は27%であった。

(2) 被愛願望を基準変数とする重回帰分析

表5のように、NVSの自己緩和不全とNPIの注目・賞賛欲求が正方向の有意な影響を示した。説明変数全体の説明率は15%であった。

(3) 気遣いを基準変数とする重回帰分析

表6のように、NVSの自己顕示抑制のみが正方向の有意な影響を示した。NVSの承認・賞賛過敏性やNPIの注目・賞賛欲求も正方向の影響を示したが、有意ではなかった。説明変数全体での説明率は17%であった。

(4) 対立不安を基準変数とする重回帰分析

表7のように、NVSの自己緩和不全とNPIの注目・賞賛欲求が正方向の有意な影響を示した。また、NVSの潜在的特権意識、そしてNPIの優越感・有能感と自己主張性が負方向の有意な影響を示した。説明変数全体の説明率は51%であった。

表4 友人関係の自己隠蔽を基準変数とする重回帰分析

基準変数：自己隠蔽（友人関係）

		重決定係数	標準偏回帰係数
NVS	承認・賞賛過敏性		-.10
	自己顕示抑制		.37 **
	潜在的特権意識		.25 **
	自己緩和不全	.27 **	-.21 *
NPI	注目・賞賛欲求		-.09
	優越感・有能感		.02
	自己主張性		-.23 **
		N=141	*p<.05 **p<.01

表5 友人関係の被愛願望を基準変数とする重回帰分析

基準変数：被愛願望（友人関係）

		重決定係数	標準偏回帰係数
NVS	承認・賞賛過敏性		.13
	自己顕示抑制		-.13
	潜在的特権意識		-.10
	自己緩和不全	.15 **	.18 *
NPI	注目・賞賛欲求		.24 *
	優越感・有能感		.02
	自己主張性		-.02
		N=141	*p<.05 **p<.01

表6 友人関係の気遣いを基準変数とする重回帰分析

基準変数：気遣い（友人関係）

		重決定係数	標準偏回帰係数
NVS	承認・賞賛過敏性		.18
	自己顕示抑制		.22 *
	潜在的特権意識		-.14
	自己緩和不全	.17 **	.09
NPI	注目・賞賛欲求		.15
	優越感・有能感		.00
	自己主張性		.09
		N=141	*p<.05 **p<.01

表7 友人関係の対立不安を基準変数とする重回帰分析

基準変数：対立不安（友人関係）

		重決定係数	標準偏回帰係数
NVS	承認・賞賛過敏性	.51 **	-.02
	自己顕示抑制		.10
	潜在的特権意識		-.16 *
	自己緩和不全		.25 **
NPI	注目・賞賛欲求		.29 **
	優越感・有能感		-.15 *
	自己主張性		-.59 **

N=141 * $p<.05$ ** $p<.01$

考 察

1. 各尺度についての分析

本研究で用いた諸井の友だちとのつきあい方尺度の項目は、4下位尺度の信頼性係数のうち2つが.80以上、残りの2つも.70以上であることから、一定の信頼性が確認されたといえよう。

NVSとNPIについては、それぞれの作成者によって因子分析が行われ、ほぼ安定した因子構造を示すことから本研究であえて因子分析は行わなかった。

NVSとNPIとの相関をみると、NPIの優越感・有能感および自己主張性尺度はNVSと有意な相関を示さず、この点からもNVSは誇大的・顕示的な自己愛傾向を測定しているのではないことが示唆された。一方、NPIの注目・賞賛欲求は、NVSの承認・賞賛過敏性および潜在的特権意識と有意な中程度の相関を示し、NVSの自己緩和不全と低い性の相関を示した。NPIの注目・賞賛欲求は、どちらかといえば誇大的・顕示的な自己愛傾向を測定しているNPIの下位尺度のなかでも過敏・脆弱な自己愛傾向との関連が推定される下位尺度であるが、今回のNVSとの相関もそれを示しているといえよう。

2. 友人とのつきあい方を基準変数とする重回帰分析

(1) 自己隠蔽を基準変数とする重回帰分析

NVSの自己顕示抑制が自己隠蔽に正方向の影響を与えることは、自己顕示抑制が自己顕示や自己表出を恥ずかしく感じて抑制する傾向であることから妥当な結果と考えられる。しかし、NVSの潜在的特権意識が正方向の影響を与えていることについては、必ずしも解釈が容易ではない。潜在的特権意識は周囲に特別の配慮を求めながらそれが得られないと傷つき、心の中で不満を募らせる傾向であることから、潜在する周囲への不信感や不満が友人関係における

自己隠蔽を促進するのかもしれない。

NVSの自己緩和不全とNPIの自己主張性が自己隠蔽に負方向の影響を与えているのも妥当な結果である。NVSの自己緩和不全は自分だけでは困難な感情緩和を他者に求める傾向であり、NPIの自己主張性は自分の意思や要求を他者に対して主張する傾向であるから、自己隠蔽とは逆の対人関係につながりやすいと考えられるからである。

(2) 被愛願望を基準変数とする重回帰分析

NVSの自己緩和不全とNPIの注目・賞賛欲求が正方向の有意な影響を示した。これは、自己緩和不全が他者に感情の緩和を求める傾向であり、注目・賞賛欲求が他者に注目や賞賛を求める傾向であることから容易に理解できる結果である。他者からそうした報酬を得なくてはならない場合、友人の誰とも仲良くし、誰からも愛されたいと願うことは自然な結果である。

(3) 気遣いを基準変数とする重回帰分析

対人的気遣いに対しては、NVSの自己顕示抑制が正方向の有意な影響を与えていた。自己顕示抑制は、他者に配慮して不自然に自己表出や自己主張を抑える傾向を含意しており、そのため対人的気遣いとの正の関連がみられたのであろう。

また、有意ではないもののNVSの承認・賞賛過敏性やNPIの注目・賞賛欲求も正方向の影響を示しているが、これも、この両傾向が他者の反応に注意を向けることにつながりやすいことから妥当な結果と考えられる。

(4) 対立不安を基準変数とする重回帰分析

NVSの自己緩和不全とNPIの注目・賞賛欲求が正方向の有意な影響を示し、NVSの潜在的特権意識およびNPIの自己主張性と優越感・有能感が負方向の有意な影響を示した。NVSの自己緩和不全とNPIの注目・賞賛欲求が対立不安に正の影響を与えるのは、この2つの傾向がいずれも他者からの反応に依

存する傾向であるから、他者と対立し他者から見捨てられる事態への恐れにつながりやすいことは容易に理解できる。

また、NVSの潜在的特権意識、NPIの優越感・有能感は、いずれも自己が他者から敬意や尊重を受けるに値すると考える傾向であり、それを他者に要求していることであるから、友人に対する対立不安を減少させる方向に機能するのだと考えられる。また、NPIの自己主張性が対立不安に負の影響を与えるとという結果も、自己主張性が高い人は他者との対立を恐れないであろうから了解可能な結果である。

対立不安に限定すれば、NPIの注目・賞賛欲求と、優越感・有能感および自己主張性とは影響が異なっており、これもNPIの注目・賞賛欲求と他の2下位尺度は性格を異にする尺度であることを示唆する結果といえよう。

まとめと課題

以上の分析から、同じ自己愛傾向といっても、過敏・脆弱な自己愛傾向と誇大的・顕示的自己愛傾向とでは、友人関係に与える影響が異なる部分があることが示唆された。自己隠蔽や対人的気遣いなど、NVSの下位尺度得点の影響が大きい友人関係の側面がみられたことは、NVSの有用性を示す結果と思われる。また、現在、自己愛傾向の測定にはNPIがよく使用されているが、本研究の結果からは、NPIの下位尺度の注目・賞賛欲求と他の2下位尺度は性格を異にするものであり、友人関係への影響も異なることが示唆された。NPIを研究に用いる際にはこの点にも注意が必要であろう。

ただ、本研究では、友人関係を取り上げたといっても、その限られた側面を取り上げたにすぎない。より範囲を広げ、他の側面についても自己愛傾向の影響を検討していくことが必要である。

引用文献

- Broucek, F. (1982). Shame and its relationship to early narcissistic development. *International Journal of Psychoanalysis*, 63, 369-378.
- Broucek, F. (1991). *Shame and the Self*. New York: Guilford Press.

- Gabbard, G.O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.
- Gabbard, G.O. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice: the DSM-IV Version*. Washington: American Psychiatric Press. (館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力動的臨床精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] — ③臨床編: II 軸障害 岩崎学術出版社)
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, 14, 89-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究 (印刷中)
- Kernberg, O.F. (1975). *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press. (水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- 諸井克英 (2003). 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究 (4) — 自己愛傾向と友だちのつきあい方 — 総合文化研究所紀要 (同志社女子大学), 20, 55-69.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割感との関連 名古屋大学教育学部紀要, 45, 45-53.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 高橋智子 (1998). 青年のナルシシズム的傾向と母親・友人関係 平成10年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 590-597.